

巻頭言

仙台市立病院院長 奥田光崇

仙台市立病院医学雑誌第42巻が電子版として刊行されることとなりました。本号には原著5編、症例報告8編のほか、昨年発表された著書・論文リスト、学会発表、院内剖検記録等が収載されています。編集作業に取り組みました刈部委員長を始め編集委員、査読委員、そして貴重な臨床経験や研究結果を論文にまとめ投稿していただいた方々に敬意を表します。

COVID-19が蔓延して3年になります。感染症の診療は軌道に乗りましたが、今年、特に第7波においては市中での感染蔓延が家庭から職員本人にも及び、自宅待機を余儀なくされるケースが増えました。院内感染の事例もあり、職員の尽力で最小限に封じ込めることができたとはいえ、感染防止対策の難しさを実感した1年でした。

世の中では各種イベントの再開や旅行支援など感染対策緩和の方向が明らかですが、病院では入院患者全員のPCR、救急外来のfull PPE対応、面会制限、職員のプライベートな行動自粛など、最大限の感染防止対策で臨んでいます。医療従事者として、より厳格な感染対策が求められることは職員一同当然よく理解していますが、それでも、解放されつつある世間とのギャップが辛いという声を聴きます。今後は国や関連学会、そして院内において、医療現場において感染症対策のどの部分をどのように緩和していったらいいのか模索が続くでしょう。個人的には、いずれはインフルエンザに準ずる扱いになることを期待しています。COVID-19蔓延の経験を通じて身についた基本的な感染対策や、オンライン会議の活用などコロナ禍がもたらしたよい点は残しつつ、感染対策は必要最小限にとどめ、ワンランクアップしたポストコロナの社会生活が待っているものと信じたいです。

2024年度から医師の働き方改革が実施されますが、それに向かって今後数年間はさらに対応を迫られることとなります。医療従事者の献身に頼ってきた医療を社会一般に近いレベルの働き方に近づけようという必然的な動きではありますが、医療現場においてやるべき仕事が増えつつあるなかで、その実現には大きな困難が伴います。まずはグループ診療や当番制などタスクシェアの徹底、長時間労働が当たり前ではないという意識改革、そしてそれを患者さんや市民にもご理解をいただくことが重要と考えています。専門職でなければならない仕事以外は他の職種に移行するというタスクシフトも、仕事をシフトされる側の人手不足や多忙もあり容易ではありませんが、環境を整えながら推進する必要があります。

COVID-19が蔓延しても働き方改革があっても、それとはかかわりなく、様々な外傷や疾病に悩まされる患者さんは24時間365日発生し、病院を頼って来院されます。それらの治療を一例一例、しっかりと行うことは我々の基本的で重要な使命です。この医学雑誌にはそうした診療の中から得た新たな発見や洞察を集め、少しでも医療の発展に役立ててもらえるよう、まとめられた記録です。様々な機会に参照し、役立てていただければ幸いです。